

【ジャン＝フランソワ・リオタール『レヴィナスの論理』（松葉類訳、法政大学出版局、2024年）合評会】

リオタールにおけるレヴィナス読解の変遷とその意義
—『レヴィナスの論理』合評会報告—

大前元伸

1. リオタールの補助線としてのレヴィナス

『レヴィナスの論理』を引くまでもなく、リオタールがレヴィナスの熱心な読者であることは疑いの余地がない。実際、主要著作の一つと目される1983年の『文の抗争』では、レヴィナス読解にまとまった分量が割かれていることは、このことを明確に示すものである。先行研究でも、リオタールにおけるレヴィナスの重要性は指摘されているところであるし、この度翻訳された『レヴィナスの論理』は、とりわけ70年代後半からの「『文』の哲学」と呼ばれるリオタールの思想の意義を検討するうえで不可欠のものと位置づけるべきだと思われる。

他方で、リオタールの思索全体から見たとき、彼がレヴィナスからどのように影響を受けていたのかは必ずしも明らかではないように思われる。とりわけ、1954年刊行の『現象学』で、その主題上半ば必然的にレヴィナスに触れていることを除けば、1970年代前半—現象学と手を切り、精神分析に強く傾倒していた時期—には、レヴィナスの思想は少なくとも主題としては前景化されていないようにも思われる。

ところが、もう少し細かくテキストを見ていくと、リオタールはかなり早い時期からレヴィナスに触れているし、論じてもいることが分かる。さらに、そこで特徴的なのは、リオタールがレヴィナスに言及するとき、時期を問わず決まって触れられる議論があるということだ。それは命令における〈あなた〉と〈私〉の非対称性（「〈あなた〉が決して〈私〉でないこと」¹⁾）、命令の受動性の問題である。

「トローラーの贈与がそうであるような出来事の比類なき特徴とは、それが私たちの知る前に受け取るものであることだ [...]。問われている行いとは理論に対立する実践であるだけでなく、ある仕方での可能なことから始めることなく現実化することなのだ [...]。彼らは聞く前に行く！ [...] あなたに話す声を聞くことは、事実上、話すものに対する義務を受け入れることだ [...]。創造主の威厳ある呼び声を無視することがかくして不可能であるので受け入れはその受動性を決して超えることがない。」²⁾

この箇所は、『レヴィナスの論理』や『文の抗争』のように、レヴィナスの思想が主題的に扱われる作品だけでなく、『言説、形象』やその同時期のテキストといった場面でも頻繁に触れられており、リオタールの思索を通して重要な参照先であるといっても差し支えない。

このように考えると、リオタールの思想においてレヴィナスの果たす役割は小さくないことがうかがえる。しかし他方で、例えば『言説、形象』のリオタールと、『文の抗争』に見られるリオタールの議論には大きな差があるように見える。それでも、レヴィナスの、しかも同じ箇所が

繰り返し長期にわたって参照されているとすれば、リオタールの思索におけるレヴィナスはどのように位置づけられるべきなのだろうか。つまり、リオタールにとって、命令における〈あなた〉と〈私〉の非対称性という問題系はどういう意味を持っているのだろうか。同じ箇所を参照しながら、一方では精神分析を読み替えた社会変革の可能性を論じ、他方では「文」の連鎖をベースとした倫理や義務を論じていることをどのように理解すべきなのだろうか。

こうした背景を踏まえ、『レヴィナスの論理』およびレヴィナスの思想が、リオタールの思索においてどのように解釈できるのかという点を検討してみたい。

2. 「外部」の根拠としてのレヴィナス思想

まずはリオタールにおける 70 年代前半のレヴィナスの位置づけ、つまり『レヴィナスの論理』の時期におけるレヴィナス理解について検討してみたい。この時期にリオタールがレヴィナスについて言及しているテキストとして代表的なものは、「*« Œdipe juif »*「ユダヤ人のオイディプス」(1970), *« Figure forclos »*「排除された形象」(1969)³⁾、*« Sur une figure de discours »* (1972) などがあげられる。これらの作品群は、時期としては『言説、形象』と同じ頃に書かれたもので、歴史的に考えるなら、欲望や欲動を中心としたフロイト解釈に基づいて自身の思想を練り上げていた時期に当たる。この時期の一つの重要なテーマとして挙げられるのが、「ユダヤ人のオイディプス」という名前が象徴的に示すように、フロイトの思想をリオタール流の「ユダヤ性」という概念から読み解くことである。

フロイトだけでなくレヴィナスもまたユダヤ系であり、その意味でユダヤ教やユダヤ文化と全く無縁ということはないにせよ、70 年代初頭におけるリオタールのフロイト読解において重要な役割を果たすのが、まさにレヴィナスの思想を引き受けた「ユダヤ性」であることは注目値する。リオタールにおいて「ユダヤ的なもの」とは、ユダヤ教の教義そのものというよりはむしろ、神と民との関係性に示されるような、一方向的で強制的な倫理関係を指している。この関係性は、レヴィナスが「あなたに話す声を聞くことは、話すものに対する義務を受け入れることである」と述べるような、絶対的な命令の構造によって特徴づけられる。

そしてリオタールは、このレヴィナスの議論をフロイトにおける無意識の扱いと重ねて論じているのである。この時期のリオタールは、無意識が言語から絶対的に異質であることを強調するために、フロイトが唱えた「平等に漂う注意」に関する議論を取り上げている⁴⁾。これは、患者の言葉を解釈する際に、先入観や価値判断を加えずに、発される言葉をすべて聞くことを指している。無意識とは、普通の言語活動によって解釈できるものではなく、むしろ意識的な言語活動を背景に退かせることでアクセスできるというわけである。リオタールはこの患者・分析家・無意識の関係性を、レヴィナス的な命令の非対称性、すなわち交換可能性を欠いた関係性を分析理論に接続しているのである。これをもっとも端的な形で論じた文の一つである*« Sur une figure de discours »*で、リオタールは、精神分析的状況をユダヤ教における民と神の関係性になぞらえている。すなわち、病気の原因を知りたいが患者（＝表象を求めるイスラエルの民）、患者の間には直接答えない分析家（＝モーセ）、そして問への応答としては表れない沈黙する無意識（＝ヤハウェ）という三者関係である⁵⁾。この関係は、分析主体が分析家に向かって言葉を発するとき、理解される以前にすでにその言葉が聴かれていなければならないという受動的な構造と響き合う。

このように見ていくと、リオタールはレヴィナスの思想を、単なる倫理の言説としてではなく、精神分析理論の再構成に資する「外部」の根拠として用いている。言い換えれば、レヴィナスはこの時期のリオタールにとって、フロイトの欲動理論において抑圧ないし排除された他者性や不可視の強制力を可視化するための理論的な補助線として機能しているのである。ここで重要なのは、命令が与えられるものでしかない、というレヴィナスの議論の核心である。命令は（受諾や拒否といった行動以前に）ただ受け入れられるものでしかなく、何らかの応答できるものではない。リオタールはこの「応答不可能性」を、精神分析における無意識の語りとして読み替えようとしているのだ。言い換えれば、意味の全体化を拒否し、言説の統一性に抗するものとしての欲動のあり方を、レヴィナスにおけるユダヤ教理解を踏まえつつ思考しているのである。

この観点から言えば、1970年代前半のリオタールにおいてレヴィナスの思想は、自身のフロイト読解を中心とした思索を補強するための道具立てであり、その根底には欲動や無意識を「外部」として位置づけるという共通の構造がある。欲動は、非時間的であり、制度化を拒み、科学的言語によっては完全には把握しきれない。他方でレヴィナスのいう「命令」もまた、それこそ後に『レヴィナスの論理』に収められたテキストにおいて試みられているように、論理的に演繹されたものではなく、先行的に到来し、受け入れるほかないものとして描かれる。こうした構造の共鳴が、リオタールにとって両者を接続可能なものとして提示していたのである。

このように、リオタールは70年代前半において、欲動の論理を解釈するための根拠としてレヴィナスの倫理思想を導入しており、すなわちレヴィナスは当時の彼にとって「外部」をめぐる理論の補助線として機能していたと結論づけることができる。精神分析の再構成という実践的・理論的課題において、レヴィナスは理念的な補完物というよりも、批判理論としての精神分析の可能性を支える存在であったのである。

3. 「外部がある」から「外部が来る」へ

1970年代後半に差し掛かると、リオタールの思想において顕著な変化が見られる。『リビドー経済』に代表されるような欲動理論に基づく批判的実践は次第に退潮し、それに代わって「言語」や「文（phrase）」の問題が前面化ようになる^{9）}。リオタールにおけるこの転向の背景には、「外部」の構造を単に受動性や異質性の記述にとどめず、それがどのような形式で言語経験へ到来するのか、そしてその到来はどのように倫理的・政治的实践と関わるのか、という問いがある。1978年に最初に発表されたテキストである「レヴィナスの論理」は、この転回に位置づけられるものであるといえる。

そうした明らかな変化が見て取れる一方で、最初に触れた通り、「レヴィナスの論理」で引用されるレヴィナスは、フロイトに依拠している時期に引用していた箇所と共通しており、やはり〈私〉と〈あなた〉の交換不可能性の問題にこだわっていることには注意を向けるべきだろう。では、一見すると全く異なる問題系の中で、同じ議論が参照されていることをどのように理解すべきだろうか。

その意味で、義務とは何かを考えるために、リオタールがカントとレヴィナスを参照すること自体は極めて順当であると言える。しかしながら、「レヴィナスの論理」や『文の抗争』で論じられるように、リオタールはここでレヴィナスの方に分があるという立場を取る。「レヴィナスにとってのみならずカントにとってかくも貴重であった、この命令者の「絶対的外在性」こそ、

他方でカントが主体の実践的言表を行う権能を因果律と同一視することで消し去ろうとしたものであった」⁷⁾と述べるように、リオタールはカントの『実践理性批判』における道徳法則の導出がいわば不完全であると批判しつつ、レヴィナスの議論の核もまた「命令者の「絶対的外在性」」にあると述べている。そして、この「命令者の「絶対的外在性」」をレヴィナスが保持している根拠こそ、「〈あなた〉が決して〈私〉でないこと」、つまり命令はただ受け取られるのみであるという点にある、とリオタールは主張するのである。

このように見ていくと、確かにここでリオタールは〈私〉と〈あなた〉の交換不可能性に触れてはいるが、強調されているのは、70年代前半のような命令を発する〈あなた〉の絶対的な他者性ではなく、絶対的な他者から到来するものが命令として機能するのはどういうことかというメタ的な問題であることが分かる。さらにその形式を、出来事の到来という形で一般化し、倫理の問題として思考するのが『文の抗争』の「文」という問題系と考えることができるだろう。とりわけ、規制的なもの（prescriptif）と記述的なもの（descriptif）を分けるものは何かを考えることで、この両者がいかに通約不可能なものであるかを示し、もって規制的なもののジャンルとしての固有性・特異性を際立たせるという『文の抗争』の主目標は、この「レヴィナスの論理」でも十分に展開されていることが分かる。

では、こうした変化をどのように理解すべきだろうか。第一に、レヴィナスへの参照は、異なる議論のために恣意的に取り上げられているわけではないという点、第二にそれでも生じている違いの背景にあるのは外部から義務の「形式」への移行だという点である。

まず注目すべきは、リオタールが初期から抱いていた「異なるもの」を相対的に捉える視点である。彼はすでに1970年代前半の段階で、「ねじれ（torsion）」という語を用いて、言説の差異や構造的非対称性を思考していた。リオタールは次のように述べている。

私が描いた形象の中で作動しているねじれ（torsion）と言われるプロセスは特に強調せねばならない。「ねじれといわれる」というのも、ねじれがあると言うためには、ねじれていないものが必要だからだ。しかるに、あなたの「応答不可能性」は、交換可能な言説と比べればねじれである。（…）しかしその反対もやはり正しい。交換可能性の「規則」（＝交換価値の法則）は、語りの規制ないし信仰の言説と比べれば完全に「ねじれて」いる。⁸⁾

この一節は、リオタールがレヴィナス的な応答不可能性を、すでに言説ジャンル間の比較という観点から捉えていたことを示唆している。ここでいう「ねじれ」とは、通約不可能性の兆候であり、それを相対的に認識する視点こそが、のちの「文の抗争」理論へと接続されることになるということではあるだろう。つまり、リオタールの70年代前半と後半との思索は、見た目ほどに「断絶」があるわけではなく、時期による力点の差こそあれど、一定の連続性は見取れると考えることができる。そうだとすれば、レヴィナスの時期を問わず同じ箇所を参照していることもそこまで奇妙なことではない。むしろレヴィナスを紐帯として両者の連続性—つまり「外部」の問題—を考えることができるといえる。

一方で、70年代前半のリオタールは、その外部たる欲動の思想を極限まで推し進めることによって限界を迎えてしまう。『リビドー経済』において彼は、外部としての欲動を無時間性やエネ

ルギーの非拘束性によって特徴づけ、科学や制度の言語がそうした力を抑圧し無害化するものとして批判的に扱っていた。しかしこの路線はやがて一元論的傾向、すなわちすべてをリビドーの流れとして読み替える方向に傾き、結果的にあらゆる言説や制度の特異性が失われることへとつながる。結局のところ「すべては欲動である」という主張に収束し、倫理や政治といった制度的営為を支える根拠を失う危険を孕むことになるのだ。先に触れた「ねじれ」の議論も、この段階ではあらゆる差異が流動的に相対化されることで、結果的にねじれ自体の特異性が消去されるという論理的帰結を迎えることになる。

こうした行き詰まりに対してリオタールが取った戦略こそが、「外部がある」から「外部が来る」への転回である。この転回は、言語の外部をただ前提とするのではなく、それがいかにして到来するか、あるいは到来しうると認識されるかという問いを導入することで、思索の方向を大きく変えるものであった。外部が存在するというだけでは、それを無視することもできる以上、倫理的あるいは政治的な実践とどう関わるかは不明なままである。しかし、外部が〈私〉に到来する、すなわち命令や触発として現れるという構造は、その到来に対する対応をめぐる新たな実践の可能性を提示する。

この転回は、リオタールにおけるレヴィナス読解の再構成と軌を一にする。1970年代前半におけるレヴィナスは、主にフロイトにおける欲動の異質性を説明するためのいわば傍証として機能していた。それは欲動という外部の絶対性を補強するものであり、主として「制度批判」の文脈で活用されていた。これに対し、『レヴィナスの論理』に代表されるような、70年代後半以降の読解においては、命令の形式そのものが分析対象となり、レヴィナスは外部の到来の論理を示す思想家として再定位される。言い換えれば、外部が〈私〉に先行して到来すること、そしてその到来がいかにして文の形式を生み出すかという問いが、リオタールの関心の中心に据えられるようになる⁹⁾。かくして、リオタールにおけるレヴィナス解釈は、彼の思索の連続性と変化を証立てるものとして機能していると考えられるのではないだろうか。

4. リオタールとレヴィナスを考えること

本稿では、1970年代前半から後半にかけてのリオタールの思想の変遷を追いながら、彼にとってレヴィナスの思想がいかなる意味を持ち、いかなる形で参照されていたのかを検討してきた。そのことから言えるのは、リオタールにとってレヴィナスは、その位置づけや意味付けこそ変化しつつも、一貫して重要な思想的参照軸であり続けたという点である。

1970年代前半の段階では、レヴィナスの〈私〉と〈あなた〉の非対称性をめぐる議論は、主としてフロイトの欲動理論を再解釈するための理論的補助線として導入されていた。そこでは、命令を発するものへ応答できないという構造が、無意識や欲動の外部性と重ね合わされることで、あらゆる制度的言説や意識の統合を解体する方向に用いられていた。この時期のリオタールにとって、「ユダヤ的なもの」とは、言語の外部としての他者であり、それが政治的实践を可能にする道具立てであった。

これに対して、70年代後半以降のリオタールは、同じくレヴィナスの命令に関する議論を参照しながらも、それを「文」の理論の中に組み込む形で再解釈し、命令の到来がどのようにして可能になるのか、そしてそれがどのように倫理的文の形式として機能するのか、という問いを前景化させる。そしてこの問いは、単なる言説の相対化にとどまらず、交換不可能な言説、すなわち

「文になれなかった文」の救済という、より複雑な倫理的・政治的問題系へと接続されていくのである。

このようなリオタールの展開を踏まえるならば、レヴィナスは彼の思索において単なる思想的な参照軸であったという以上に、一貫して「外部の論理」を体現する存在であったと評価することができるだろう。それはフロイト読解における異質性の保証人として、あるいは言説の抗争における倫理的契機として、時期に応じて異なる機能を果たしつつも、常に「応答不可能性」「交換不可能性」といったキーワードを通じて、リオタールの思索を支える理論的支柱となっていたと言えるだろう。

最後に、レヴィナスとの関連でリオタールに関して立てられる問いとして、これほどまでに「義務」の問題とフロイトの理論にこだわりながら、リオタールの語彙に「超自我」という概念がほとんど現れないという点がある。リオタールにとってレヴィナスとフロイトはともに重要な参照項でありながら、両者をつなぐ手立てとなりそうな超自我については言及が少ないのである。実際、例えば精神分析家のラプランシュは、超自我の持つ「定言命法」のあり方を考えるべきだとしたうえで、レヴィナス、フロイト、リオタールの名前を挙げその共通性を主張する。

私は比較対照するのが興味深い三人の名前を挙げる。まずレヴィナスで、これは宗教的命令の領域におけるものである。それにリオタール、そして同様にフロイトである。三人ともこのように言うのだ。カントのいう命令は、彼が主張するほど定言的なものではない。というのも、その命令自体演繹されるものだからだ（しかも、その演繹は失敗している…）。誤りはまさに、「定言」という側面と「自律性」という側面を同列に扱ったことにある。真の定言命法であれば、自律的ではありえないし、自由意志の概念から演繹されることもありえないだろう。「そうせよ」こそが、課せられるものであり、正当化される必要のないものである¹⁰⁾。

かくして、超自我という問題からリオタールとレヴィナスをつなげて、あるいは両者の差異を考えることもまた可能であるように思われる。これはすぐに答えられるような問いではないにせよ、こうした問いが可能になるのは、リオタールにとってレヴィナスがやはり重要な意味を持ち続けているからであり、そうした問を考えるうえでも『レヴィナスの論理』が日本語でアクセスできるようになったことの意義は極めて大きいと言わなければならない。

註

1) Jean-François Lyotard, « Logique de Levinas », *Logique de Levinas*, Paris, Verdier, 2015, p.66. (訳書 86 頁)

2) Emmanuel Levinas, *Quatre lectures talmudiques*, Paris, Minuit, 2005, p.91-108. (訳書 103-122 頁)

3) このテキストは、書かれた時期こそ 60 年代であるが、公表されたのは *L'Écrit du temps 5*, Paris, Minuit, 1984. においてであり、執筆の 15 年後である。その事情についてはこのテキストの刊行時に後書きとして追記されているが、いずれにしてもこのテキストが「レヴィナスの論理」よりもさらに後に公表されたという事実は注目すべきだろう。

4) Jean-François Lyotard, *Discours, figure*, Paris, Klincksieck, 1971, p.380-381. (訳書 580-582 頁)

5) Jean-François Lyotard, « Sur une figure de discours », *Des dispositifs pulsionnels*, Paris, Galilée, 1973, p. 129.
（訳は大前による）

6) ただし、リオタール自身は『文の抗争』で「文」の問題を考えるに際して、フロイトへの向き合い方を再考していたとは述べており、精神分析と完全に手を切ったわけではない。Cf. Niels Brügger, Jean-François Lyotard, « Examen oral : entretien avec Jean-François Lyotard », *Lyotard, les déplacements philosophiques*, Bruxelles, De Boeck, p.138-140.

7) *Logique de Levinas*, *op. cit.*, p.60.（訳書 78 頁）

8) Jean-François Lyotard, « Sur une figure de discours », *op. cit.*, p. 130.（訳は大前による）

9) この変化の先にあるのが、「事後性」や「触発」といった概念群である。たとえば『ハイデガーと〈ユダヤ人〉』においてリオタールは、事後的にしか意味づけできない出来事の構造を問題にし、それが倫理的応答の基礎となることを示唆している。ここでの問題意識は「文になれなかった文」をいかに扱うか、あるいはその痕跡をいかに保存するかという問いであり、つまりは外部としてすら認識されない外部をどう認識するかという問いである。

10) Jean Laplanche, *Nouveaux fondements pour la psychanalyse*, Paris, PUF, 1987, p.136.